



33 マーシャとクマ (ロシアの昔ばなし)

昔あるところにおじいさんとおばあさんが住んでいて、2人には、マーシャというかわいい孫娘がいました。
ある日マーシャは、森でクマの家に迷い込みました。マーシャは仕方なくそこで暮らし始めました。
あるときマーシャは家に帰る方法を思いつきました。
「一日だけでいいからおじいさんとおばあさんにお菓子を持っていきたいの。」
「ダメだダメだ、代わりに俺が持って行ってやろう。」
マーシャは、クマが気づかないうちにお菓子の入った背負いかごにそっともぐり込みます。
ところが、クマは途中で休憩して、かごを開けて中を見ようとします。
マーシャはかごの中からささやきました。「お菓子を食べちゃダメよ! ちゃあんと見張っているんだから!」
クマは遠くの高いところから見張られていると勘違いして、とうとうかごの中を見ることなく、
マーシャをおじいさんとおばあさんの元へ送り届けました。
3人は、いつまでも仲良く幸せに暮らしました。

マーシャの知恵が、クマを上手に操りました。

ローム君の新・博物日記

世界昔ばなしを科学する

このシリーズは、半導体技術で世界に貢献するロームがお届けしています。おなじみの世界の昔ばなしの中から毎回テーマを一つとりあげ、そこに隠れているいろいろな不思議を科学の視点で見つめます。さて、今回のおはなしは…

●自然との共生が、素朴に描かれます。
「マーシャとクマ」は、ロシアの他にも、イギリス、北欧諸国などに広く分布します。子供が森でクマなどの猛獣に捕まり、脱出を計るというパターンは、昔ばなしでよく見られる典型。狩猟生活していた西洋人にとって「森でいかに他の動物との関係を築いていくか」が、大きなテーマになっていたからです。有名なものだと、「ヘンゼルとグレーテル」も、宗教的な影響から動物が魔女になっているものの、同じテーマを反映しているとか。そして、ほとんどの結末は、人間が知恵を使って最後は強い獣に勝ちます。一方、日本の場合は畑をめぐる争いになります。「かちかち山」の冒頭部分では、おじいさんが畑を耕しているとタヌキがちよっかいを出してくる、といったように。人間が自然の中で生きていく姿は、いつまでも語り継がれます。

●森でクマに出会ったら。
昔ばなしのように、日本でも最近、クマと遭遇する事件が多発しました。この現象は、同じく多発した台風によるクマのパニック、食料不足などが原因として推定されるのだとか。万が一出会ってしまっても、クマはイヌなどと同じく走って逃げるものを追いかける習性があるので、走って逃げるのは禁物。何より、クマは短時間であれば時速50km以上で走ることができます。ツキノワグマなら、重い体でも木登りが得意。泳ぎも達者です。噛む力はトラより強いと言われ、

ヒグマが12mmの鉄の棒をかみ切った例もあります。下手に戦いを挑むのは無謀というもの。超至近距離で突発的に出会ったのでなければ、大声をあげずにクマの目を見ながら、ゆっくり離れるのが基本です*。昔ばなしのマーシャのように、冷静に行動するのが良いようですね。

●高いところで、活躍しているモノ。
マーシャは、「高いところから見ている」と伝えて難を逃れました。そんな高い所からの情報を役立てているのは、人工衛星。例えば大地震が発生したとき、道路が寸断されている箇所の情報は大変重要です。これには、道路の様子が分かるほど詳細に広範囲で撮影できる衛星写真が活躍しています。ところがこの写真は、パシャッと簡単に撮れるわけではありません。現在の人工衛星は、超高解像度で撮ろうとすると、秒速8kmという高速で地球を周回しなければならず、軌道の下を細長い「短冊」型でしか撮影できません。つまり、一枚に見える写真はこの短冊型に撮影したものを、精密につなぎ合わせているのです。写真より、スキャンに近いですね。緊急事態の場合は、各国の衛星に協力を要請していち早く画像を入手するのだとか。今後も昔ばなしのマーシャの知恵のような、人々の暮らしに役立つシステムの発展が望めますね。

昔ばなし監修/昔ばなし研究所所長 小澤俊夫
取材協力/(財)地球科学技術総合推進機構理事長 坂田俊文
日本ツキノワグマ研究所理事長 米田一彦

※例外もあり、安全を保証するものではありません。